

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 22 日現在

機関番号：34307

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25463509

研究課題名(和文)小中学校教員の子どものグリーフに関する認識とグリーフケア

研究課題名(英文)Elementary and Junior high School Teachers' Perception with Children who had Experienced Bereavement

研究代表者

荃津 智子(KUKITSU, Tomoko)

京都光華女子大学・健康科学部・教授

研究者番号：10177975

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：小中学校教員を対象に死別を体験した子どもへの関わりの実態とその認識を調査した。公立小中学校教員460名から回答を得た。死別経験を持つ子どもと接した経験をもつ者の半数が、子どもと死別について話す機会を持っていた。話すきっかけは、「子どもの様子が気になった」が最も多く、話さなかった理由は「子どもに辛い思いをさせる」、「どう話してよいかわからない」と同時に、「学校が関わることではない」等も少数ながらあった。自由記述内容では、子どもと死を語ることに肯定的な記述が多い一方、「死別は家庭の問題」「教員は関わらない」等、関わりに消極的な状況も明らかになり、学校におけるグリーフケアの課題が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：We surveyed elementary and junior high school teachers on their perceptions and actual interactions with children who had experienced bereavement. Subject:460 elementary and junior high school teachers. Half of the individuals who had a history of interactions with children who had experienced bereavement also had the opportunity to talk with the child about the bereavement. While in many cases the impetus for the conversation was, "concern about the child's condition," reasons for not conversing with the child included, "not wanting to bring up painful memories for the child," "not knowing the best way to talk to the child," "it is not the domain of the school," and so on.

While many positive statements regarding talking to children about death were written in the free response section, we were able to identify the passive state of interaction exemplified by statements such as "it is not the concern of teachers," etc.

研究分野：小児看護学

キーワード：グリーフケア 死別した子ども 小中学校教員 認識 子どものグリーフ

1. 研究開始当初の背景

子どもにとっては、身近な親やきょうだいの死別は非常に大きな喪失をもたらす出来事であり、適切なサポートが必要である。わが国では、死別した子どもの悲嘆、喪失に関しては小島(2004)、峰島(2008)は、学童期から思春期に死別体験のある大学生へのインタビューを行い、その当時感じたこと、考えたことなどを明らかにしている。死別した子どもへのサポートには、近年、医療関係者の中では関心が向けられるようになり、研究報告や学会でのテーマセッションでも取り上げられることも少なくない。しかし、関心が向けられるようになってきたとはいえ、子どもの喪失や悲嘆の理解については十分とは言えず、医療関係者に限らず多くの大人が子どもと死の問題を語ることは抵抗感や戸惑いがあるというのも実情である。そのため子どものグリーフケアの実践についてはまだまだ課題が多い。

欧米では、子どもにとって身近な人との死別による悲嘆やその反応に関して研究が1980年代頃より進められ、適切なサポートが取り組まれるようになってきている。特にアメリカのタギーセンターは、死別など喪失の体験を持つ子どもに対するサポートを先駆的に活動してきた。また、Auman(2007)は学校における死別した子どものグリーフケアの必要性を述べ、学校看護師(School Nurse)への子どもの悲嘆、喪失についての教育が重要であると述べている。

荃津ら(2008)の死別経験のある子どもを持つ親へのインタビュー調査では、学校の教員が子どもの喪失や悲嘆への理解が十分でないため、子どもの死の問題に十分に向き合ってもらえず、学校生活の中で、子どもがさらなる喪失ともいべきものを感じているという実態を明らかにした。わが国では子どもが多く時間を過ごす学校において子どもと多くの時間を共に過ごす小中学校教員

を対象とした子どもの死別、喪失、グリーフケアに対する認識や実態について調査したものはほとんどない。

2. 研究の目的

小中学校教員らを対象に、死別経験のある子どもとの関わりの実態、子どもと死を語ることへの意識について明らかにし、学校における子どものグリーフケアのあり方について検討を行う。

3. 研究の方法

無作為抽出した公立小中学校を対象に個別封筒に各教員宛の調査依頼文書、調査票、返信用封筒を同封したものを各学校に学校長宛の調査協力依頼文書とともに郵送し調査を依頼した。

調査票は無記名自記式、個別封筒で各教員に配布されるようにし、各教員の回答は個別の返信封筒による郵送返却での回収とした。

調査期間 2014年4月~7月。

調査内容は、教員の年代、経験年数、身近な人と死別した経験のある子どもと接した経験の有無、死別について子どもと話した経験の有無とその理由、その時の印象に残った子どもの様子、教員として死別した経験を持つ子どもへのどのように関わりたいと考えているかなどの認識に関する質問項目(選択回答式)および死別時に子どもとそれらの問題を語ることに關しての考えを自由記述で回答する内容で構成した。

分析方法は、質問項目は統計的単純集計により分析し、自由記述内容は記述内容の類似性を比較検討した質的分析法とテキストマイニング法により分析した。

4. 研究成果

(1) 対象者の属性

調査票配布数3,749名に対し460名から回答(回収率12.3%)。小学校教員(養護

教諭含) 160名(回収率9.7%)、中学校教員(養護教諭・栄養教諭含) 299名(回収率14.3%)、学校所属先が不明な栄養教諭1名。分析は所属先不明の1名を除き459名を対象に行った。

職種別割合は、小学校教諭151名32.8%、小学校養護教諭9名2.0%、中学校教諭276名60.0%、中学校養護教諭22名4.8%、中学校栄養教諭1名0.2%であった。小学校全体160名34.9%、中学校全体299名65.1%と中学校教員からの回答が多かった。教員の年代は、小中学校教員いずれも30~50代の年代層の回答が多く、この層で約90%弱を占め、経験年数でも年代層と連動し10年~30年のものが60%弱という状況だった。

(2) 死別した経験をもつ子どもと接した経験の有無とその状況

死別した子どもと接した経験があるとの回答は小学校教員の70.2%、中学校教員81.9%、養護教員では小学校で77.8%、中学校で59.1%であり、教員全体で353名76.9%に経験があった。子どもが死別した相手は、父親や母親が50%以上であり、その他祖父母、きょうだい等であった。また、死因は病気73.7%、事故・災害29.2%、自死(自殺)28%という結果であった(複数回答)。

接した経験があると答えた353名に亡くなった方の死について子どもと話す機会があったかの問いに、話す機会があったとの回答は、小学校教員48.1%、中学校教員49.8%、養護教員小学校14.3%、中学校69.2%であり、小学校、中学校教員いずれも半数程度が子どもと話す機会を持っていた。

話す機会をもった173名の話したきっかけは、「子どもの様子や行動が気になったから自分から声をかけた」という理由が小中学校教員にいずれにも最も多く全体の

65.3%、「子どもからの質問、相談」(12.1%)、「家族からの相談」(6.4%)であった。

子どもと話した内容は、小中学校教員で違いが見られ、小学校教員は「死別した人との思い出等」が59.6%と最も多く、中学校教員は「死別したことの子どもの悲しみや思い」に関すること66.1%と最も多かった。次に「死別した人の病気や死の原因」が39.7%、「思い出」は37.2%とほぼ同数であった。

話す機会がなかった178名の理由は、小中学校教員の回答に違いが見られず、小中学校教員全体で「子どもには死はつらすぎると思った」が最も多く23.6%であった。その他「話すタイミングがなかった」「どのように声をかけてよいかわからなかった」「子ども様子がいつもと変わらなかった」等が小中学校いずれでも10%前後であった

(3) 死別した子どもへの教員の関わりに関する考え

459名の「死別する子どもにどのように関わりたいか」の問いには、小中学校教員のいずれも「子どもの気持ちを聞く時間をとりたい」が多く、全体で38.0%であった。「子どもと話をしたい」と合わせると50%弱であった。しかし、「自分からはあえて話さない」は全体で15.7%、「家庭が考える問題で積極的に関わるつもりはない」「時間がたてば(子どもは)忘れるので話す必要はない」などの回答も数%程度あった。一方「子どもと話したいが、どう話してよいかわからない」も小中学校全体で9.4%であった。この項目への自由記述でも同様の内容について自らの表現で語られていた。

(4) 子どもと「死別のことなど」死を語ることについて(自由記述内容)

記述内容による質的分析

記述内容全体は、「子どもに生きることの大切さ、故人の思いを伝えたい」「子どもの話を聞いてあげたい」「子どもを支えたい、見守りたい」といった死別した子どもと死を

語ることに肯定的な記述が多かった。小学校教員は「日常の生活を早く取り戻してやるのが、本人にとっての『生きる』ことになると思う」といった『いつもの生活を送れる』ことに視点を置いたもの、中学校教員は「亡くなった人の死を通して積極的に自分の将来について考えることができる子どもを育てていくことが教員として大切だと思う」といった『死別が子どもの将来、今後の生き方に活かせる』という視点を置いた記述が特徴的であった。

子どもと死を語ることに肯定的な記述がある一方で「教師からあえて死を語ることはしない」「死別は家族の問題」といった記述や「学校で子どもと死について話すことが現実難しい」「死別した子どもへの関わりは難しい・悩む」「死別した子どもとの接し方がわからない・躊躇がある」といった記述も少なくなかった。これらの記述は、小中学校教員いずれにも多かった。

子どもと死を語り、死別した子どもへの関わりが難しい理由として、小中学校教員いずれも、子どもの家族関係の複雑さや核家族化、母子・父子家庭の増加、死別を経験する機会の減少等をあげていた。

テキストマイニング法による記述内容特徴

小学校教員

総抽出数は2,065語。教員の自由記載内容を特徴づける上位10語は「思う」「子ども」「死」「大切」「話す」「人」「必要」「生きる」「子」「なくなる」の順であった。その関係は共起ネットワークのサブグラフによりあらわした。1~7の共起の特徴は、以下の記述を含むものであった。

「子ども」「心」「死」「思う」「考える」：死別したことへの子どもの心を思う、考えるという内容
「人」「身近」「亡くなる」「悲しい」

「辛い」「伝える」：死そのものの辛さ、悲しさを思う内容

「生きる」「命」「大切」「死ぬ」「教える」：死を通して生、命の大切を教えるという内容

「状況」「家族」「対応」「環境」「家庭」「難しい」：状況や家庭環境などにより対応が難しいとの内容

「時間」「必要」「教師」：対応等に時間がかかるといった内容

「様子」「日常」「見る」「保護」「受け止める」

「関わる」「日頃」「生」

6、7はいずれも子どもの日常生活の様子を見る、保護する、受け止める、関わるなどの内容

小学校教員の自由記述の特徴は、感情を表す「悲しい」「辛い」などの出現頻度が高く、「日常」や「日頃」の様子を見る、受け止める、関わるということ、「状況」「家庭」「環境」により「対応」が難しいと考えているなど子どもの日常生活に関心を寄せていることがうかがえた。死別などの体験から、「命」「生きる」の大切さを伝えたいと考えていた。

中学校教員

総抽出数は4,261語であった。教員の自由記載内容を特徴づける上位10語は「考える」「話」「自分」「死別」「生徒」「聞く」「気持ち」「伝える」「親」「感じる」の順であった。その関係は、共起ネットワークのサブグラフにより表わした。1~9の共起の特徴は、以下の記述を含むものであった。

「子ども」「気持ち」「聞く」「話す」という子どもの気持ちを聞く、話すという内容
「人」「死」「生きる」「大切」「考える」という人の死や生きることを考えることが大切という内容

「教師」「家族」「親」「死ぬ」

「教員」「家庭」「立場」「指導」「学校」
「それぞれ」
「教育」「必要」「機会」
「子」「状況」「場合」
「自身」「経験」「死別」の子ども自身
または教員自身の死別経験の記述を示す
もの
「言葉」「難しい」「今」「感じる」の
言葉かけが難しい等の内容

「人間」「関係」は人間関係を示すもの
中学校教員は、死別した経験を持つ生徒の
気持ちを聞く、生徒が自分の体験を話すこと
が大切であると考え、人の死、生について考
えることが大切だと記述。一方、教員という
立場や学校での関わりが難しい、家庭それぞ
れの問題であると考えていることも明らか
になった。中学校教員は自身の死別経験につ
いての記述も多く、教員は自身の死別経験と
合わせ、学校という場で死別した経験を持つ
生徒へどのように関わるべきか模索してい
る様子が伺えた。

以上より、小中学校教員の8割程は実際に
身近な人と死別した子どもと接したことが
あるが、死別した子どもと関わり話をしたの
は、そのうち半数程であった。また、体験の
有無とは別に、教員として死別した子どもと
話す時間をとりたい、話をしたいと考えてい
たのは全体の半数弱であり、小中学校教員の
半数は、死別した子どもとの関わりには積極
的とはいえない実態が明らかになった。

積極的に関わらない理由は、少数ながらも
「(死別の問題は)家庭が考える問題」「時
間がたてば子どもは忘れる」「子どもにつら
い思いをさせるから話さない」などはじめか
ら学校の問題ではない、教員が関わる問題で
はないとするものも少なからずあった。一方、
「子どもと(死の問題で)どのように関わっ
てよいかわからない」なども少なくない。子
ども(生徒)を対象とした教育の専門職でも
ある小中学校教員でも、死の問題で子どもと

関わることへの躊躇と戸惑いがあることが
推察された。しかし、死別した子どもへの調
査等では、「学校の先生にわかってほしい」
等のサポートを求めており、子どものニーズ
と教員の考えにずれがあるともいえ、多くの
時間を過ごす学校での子どもの死別などの
喪失へのサポートのあり方が今後の課題と
いえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計6件)

田中さおり、荃津智子、小中学校教員死
別した子どもとの関わりに関する実態調
査、日本小児保健協会第62回学術集会、
2015.6.長崎.

荃津智子、田中さおり、死別や死の問題
を子どもと話すことへの小学校教員の認
識、日本学校保健学会第62回学術集会、
2015.11.岡山.

荃津智子、田中さおり、小学校教員がと
らえる「子どもの死の理解」について、
日本学校保健学会第62回学術集会 2015.
11.岡山.

田中さおり、荃津智子、小学校教員の死
別した子どもと死を語ることへの思い、
日本学校保健学会第62回学術集会 2015.
11.岡山.

荃津智子、工藤悦子、田中さおり、死別
した経験を持つ子どもに対する小学校教
員の対応や考え - 自由記述内容からの分
析、日本小児看護学会第26回学術集会、
2016.7.大分.

工藤悦子、荃津智子、田中さおり、死別
した経験を持つ生徒に対する中学校教員
の対応や考え - 自由記述内容からの分析、
日本小児看護学会第26回学術集会 2016.
7.大分.

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://griefcare-children.com/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

荃津 智子 (KUKITSU Tomoko)

京都光華女子大学健康科学部・教授

研究者番号：10177975

(2)連携研究者

田中 さおり (TANAKA Saori)

天使大学看護栄養学部・助教

研究者番号：00559825

(3)研究協力者

工藤 悦子 (KUDO Etsuko)

札幌保健医療大学看護学部・助教

研究者番号：70438422